

【エッセイ・回顧】

愛知大学の底流

東亜同文書院大学第46期 飯塚 啓

昭和21年(1946)11月15日、“愛知大学”という学校が愛知県豊橋市に呱呱の声をあげた。愛知県にあるから愛知大学というだけのネーミングではない。ギリシャの「哲学」の語源である“フィロソフィ”(Philosophy)、つまり「知を愛する」という理念を、その名前に深く刻みこんだものである。

その大学はひとりの男のハートから生まれた。

その男の名は本間喜一、その時55歳。

一高、東大を経て第一次大戦直後のドイツへ留学。やがて東京商科大学(現一橋大学)の教授となり、その後、上海に転じ、昭和19年、東亜同文書院大学の学長となった。

その本間喜一のハートとは・・・・。

昭和20年8月15日上海で敗戦の日を迎え、大混乱の中、同文書院の学生、職員すべてを無事に引揚げさせて、ひと息吐く暇もなく、本間のハートは動き出した。

自分が学長として預かっていた東亜同文書院大学は敗戦により廃校となり、学生は内地に引揚げ、四散した。

廃墟、窮乏、混沌と飢餓。戦後の日本は惨憺たるありさまであった。

騒然とした世情の中、あの愛すべき学生たちは何処に消えて行ったのか、気がかりはそこにあった。

自分の責任に於て、何とかせねばならな

いと心を砕いた。

さらに思いは、同文書院の学生たちのみならず、他の京城、台北、満州等の外地から引揚げてきた学生たちにも及び、又、陸士、海兵等軍部関係の学生たちも受難の道に立たされていることを思った。その他内地にも様々な理由で「寄る辺」を失った学生たちも数多くいた。

教育に携わってきた者として、この学生たちを何としても救わねばならぬ。自分に出来ることは何か。その答えはすでに胸のなかにあった。この打ちひしがれている日本に新しい理念をもった大学を作ること。それだ。

そのハートから発した流れは、多くの共鳴者、協力者を生み、力強い仲間を呼び込み、歯車は動きだした。

本間の学識。ドイツ留学で体験した超インフレ社会の実感。荒廃したドイツに住んでみて、得られた教訓。そして本間の交友から発する広い人脈。自ずからなる人望。その様々なものの上に立って本間のハート、ブレイン(頭脳)、スピリット(気概)が三位一体となって発動したのだ。

大学というような教育機関を創るためには頭脳だけではダメで、何よりも他者のために何かを為そうとする暖かいハートが内蔵されていなければならない。又、幾多の困難を乗り越えて創り上げてゆこうとする気概もそこに存在しなければ前に進むことはできない。

ハート、ブレイン、スピリットその三つの一つが欠けても、この大学は成就しなかったろう。

小さな流れはやがて幅を広げ、ついに大学となって結実した。

さまよえる学生たちの収容、救済を目指すと共に、その一方で新生日本の地平を拓く、新しい理念を標榜する大学、それが愛知大学の目指すものであった。

終戦の日からたった1年3ヶ月、はやくも豊橋に灯がともったのである。

これは極めて小さな灯であったかもしれない。しかし廃墟の中の日本に、予科3年、学部3年の6年制の大学を一举に打ちたたてたということは大事件であった。

当時、日本中には何百校という大学、高等学校、専門学校が存在し、何千人という学者、教育者がいた筈である。だが誰ひとりとして学生たちの救済をとらえ、実行に踏み出した人はいなかった。

救済、そして新しい知を求め、且、国際的人材の育成というテーマを掲げ、企画を練り、それを現実のものとしたのは本間喜一とそのグループだけであった。

昭和22年1月15日、愛知大学はまず予科一学年から三学年まで377人を集め、更に5月には学部一年から三年まで204人が入学。合計581人の学生を迎えて開学した。校舎には豊橋の旧陸軍予備士官学校の兵舎を借用して当てた。ところどころ窓ガラスが破損し、うすら寒い校舎であったが意気軒昂たるものがあつた。これは戦後最初にして、且、日本最後の旧制6年制大学の誕生であった。

そんな愛知大学のもとはどこにあつたのだろうか。それは案外間近なところにあつたと推察される。

東亜同文書院大学呉羽分校という存在で

ある。

昭和20年7月に開校し、終戦の日を挟んで、昭和20年11月に閉校という通算わずか45日で消えていった分校である。

昭和20年3月、東亜同文書院大学の入学者は予科194名、専門部215名であった。

昭和16年12月に始まった戦争は20年3月には終盤を迎え、戦局はますます苛烈を極め3月10日東京大空襲。東京の下町はほぼ壊滅した。見渡す限りの焼野原、焼失した家屋は27万戸、死者は10万人を超えたという。つづいて3月末、京浜工業地帯、そして名古屋、大阪その他の都市も空襲により、次々と焦土と化していった。

4月米軍沖縄上陸。6月沖縄陥落。このような状態の中で全国の通信網も交通機関も杜絶寸前であった。(上野駅も爆撃を受け3月現在汽車は発着不能であった)

同文書院の入学者には4月も、5月になっても入学式、そして上海への渡航予定の通知はなかった。アメリカ側に制海権、制空権を共に奪われている状態では渡航など到底無理であった。

ここにも行き場を失った迷える羊たちがいた。

20年7月上旬、やっと大学本部からの通知が届いた。その頃、通信網はズタズタであり、通知は全員に届いたかどうかは定かではない。

『二十年七月二十五日 富山県婦負郡呉羽村の呉羽航空機株式会社内に参集されたし』

『現地に於いて勤労働員という形で集合し、そこに同文書院の分校を開く』という内容の文書であった。(『但し、米五合持参のこと』という当時の状況を偲ばせる文章もあった)

7月のその開校の前から、学生は全国各

地から集った。予科、専門部併せて新入生 177 名、内地に帰郷していた在校生若干名、上海から分校を開くためにやって来た教授陣 11 名、内地留学していた教授 2 名。合計 190 余名である。

戦争末期の危機的状況の中で、どんな経路を辿って、学生たちは、全国から呉羽に集って来たのだろうか。この求心力は何なのか。この熱は一体何なのだろう。

それにもまして、^{さいき}斎伯守分校長以下 11 人の教授たちは危険を冒して、決死の思いで、どこを、どうして上海から呉羽にやって来たのであろうか。

そもそも、誰が分校の計画を樹て、教授を人選し、送り出したのだろうか。(苛烈極まる戦争下に分校開設など狂気の沙汰であった)

多分、これも本間学長の責任の下で決定したものであろう。

赴任する側。送り出す側、大変な覚悟であったことは間違いない。

そこに最悪の危機があっても、迷える羊がいる以上、そこに行って救わねばならぬという、ハートと気概と行動があったということである。

これは、実に愛知大学が設立される僅か 1 年前の出来事であった。呉羽分校の存続期間は超短期間。7 月から、8 月 15 日の終戦の日を挟んで 11 月 15 日まで断続した 3 ヶ月半であった。

呉羽分校が開校して間もなく 8 月 1 日夜、呉羽の隣り町・富山市が大空襲を受け、ここも一面焦土と化してしまった。8 月 2 日呉羽分校の学生たちは救援隊を組織して、富山市に入って救援活動を開始した。

8 月 6 日広島市にアメリカ空軍による原爆投下。市街すべてが廃墟と化し、死者は

二十数万人。爆心部にいた数万人は原爆の超高熱により、一瞬にして溶解されてしまったという。8 月 9 日長崎市に原爆が投下され十五万人が死亡した。

激浪に翻弄される日本。日本の命運に焦燥感を募らせつつも、呉羽分校は 8 月 16 日に一旦閉校、同年 10 月 15 日に再開、11 月 15 日に閉校のやむなきに至った。閉校時の学生数は 240 名に達したという。

校舎も宿舎も工場の寮。授業は文字通り座学。存続期間は約 3 ヶ月 (実質 45 日)。寺子屋に毛の生えたようなちっぽけな存在だった。しかし「学校」は建物ではない。時間でもない。^{あした}“朝に道を聞かば、^{ゆうべ}夕に死すとも可なり”という至言もある。

とはいうものの、そういう極限の状況の中で、場所も、建物も、時間も、その時期に求め得られた最大限のものであったのだろうが、学校としてはまことに貧相なものであった。

それでも学生たちは何かを求め、集まり、何かを学び、そして、全国に散っていった。或いは俱に語るべき友を求めたのかもしれない。

これは嵐の中であって、必死に何かを求めて生きた、凝縮されたひと時ではなかったか。そして何が残ったのだろうか。

この小さな物語の経過と経験は本間喜一の体内を通り、ハート、ブレイン、スピリットの三者一体の底流となつて、約 1 年後の愛知大学の設立につながっていったのではないだろうか。

更に、遠く底流の源を探れば、明治 34 (1901) 年の東亜同文書院の創立に行き着く。

初代院長根津一は広く暖かいハートを蔵し、又厳しい王道精神の教育によって、同

文書院の骨格を形づくった。

19世紀、列強による中国侵略が強まり、やがては日本に波及するであろうことに危機を抱いた先覚者の一人根津は、中国を侵略から守るには、中国の国力を増大させねばならぬ。そのために中国の人々に助力し、日中協同して侵略に抵抗しなければならぬ。そのことに力を尽くす人材を育成しなければならぬ。中国の興亡はアジアの運命につながり、日本の存立にも深く関わる。日中両国が提携・協力するためには、人材の育成が急務であると信じた。そして教育面での役割を担おうとしたのである。

欧米各国の侵略、謀略の渦巻く大都会上海。排日運動も盛んであった。そんな環境の下真ん中に学校を設立するなどということはかなりの冒険であった。しかし、その使命感と方向は揺るがなかった。根津は常に、古典「大学」を傍らに置き、霸道、権道を排し、王道を往かねばならぬと説く。言語莊重、挙止端正、礼節を重んじる人。且、斗酒なお辞せず、豪放の人。根津一のそんな風格に、在校した学生たちは感銘を受け、心服し、その講義のときには一人の欠席者もなかったという。人間形成の教育であった。ハートが暖かく、学生ひとりひとりに気を配り、病気の学生あれば、寮まで行って、見舞い励ましたこともあったという。

更に、特筆すべきは「県費生」という奨学のシステムを創案したことである。

県費生とは、全国府県に依頼して、優秀な学生を選抜し、派遣して貰うというシステムである。学費、生活費（寮費）、小遣いまでの全費用を府県が一切負担するという一石三鳥のシステムであった。

一つは優秀な学生を全国から集められるということ。

二つはその優秀な学生が学費の心配なし

に学べること。（異邦の大都会上海。そこに存在する学校に学べるということは、当時の全国の学生たちの夢であり、ロマンでもあった）そして、一方ではある覚悟も必要であったが…。また、同文書院は県費生だけで構成されていた訳でもなく、その半数以上は自ら志望し、自費で学ぶ私費生であった。

三つめはその府県からの派遣生が卒業して、世に出て有為な人材となって羽搏いた時、その府県の誇りとなった。

優秀な志ある学生＝費用の捻出に悩む学生を全国から掬い上げ、且、学校の水準を高く維持できるという画期的なシステムの構築であった。（現在はいろいろな奨学金のシステムが存在してかなりリッチな環境にあるが、当時は授業料も生活費も不要というのは、陸士とか海兵とか軍部関係の学校だけであり、同文書院の県費生システムは、民間では唯一の存在であったと思われる）

これも院長根津一のハートから出た知恵ではなかったろうか。

奇しくも同文書院初代院長と同文書院大学最後の学長がそのハートから発し、救済の思想と実行を行なったことは単なる偶然であろうか。

同文書院→呉羽→愛知大学。いずれも尋常ならざる状況の中で、並々ならぬハート、ブレイン、スピリットの持主たちが幾多の困難を乗り越えて、主導的にそれらを創り、人材を輩出し、維持してきた。そこに一種の底流とでも呼ぶべきものが見え隠れしてはいないだろうか。学校の歴史の底に消えようとして、消えない流れが音もなく流れている。そういうことではないだろうか。

愛知大学創立 67 年、人間ならば「古希」

を目前に控えているという年輪である。

長い道程である。しかもまた更に歩いてゆかねばならないという現実がある。だとするならば、ある時点で立ち止まって、来し方を振り返り、原点に立ってみることも必要なのではないだろうか。“愛知大学とは何か”“愛知大学とは何ぞや”と……。

底流は今も静かに、その岸边を洗っている。

(文中敬称略)

(付 記) 同文書院は当時の先覚的知見によって、その思想に賛同し、協力を惜しまなかった人々の支持の下に創立された。

愛知大学もまた敗戦という絶望的現実の中から、創設された。呉羽分校は日本国中がアメリカ軍によって爆撃を受けている状況の中で、ほんのひととき。創られ、消えた。

愛知大学を解くキーワードの一つに“創”という文字がつけ加えられるかも知れない。

いかなる困難な状況の中に置かれていても事態を解決するために、今までそこになかったものを創り出して対処する、そんな“創”の姿である。

愛知大学の創立に当たっては幾多の賛同者、献身的な協力者がいて、愛知大学という一つの“山”を築くことが出来、維持して来られたのである。その多くの先人たちの努力に対して深い敬意を表するものであるが、本文では“底流”の存在を観るために、敢えて象徴的な出来事、象徴的な人物に焦点を絞り、大局的な視点から書き進めたことをご理解いただきたい。あとは各研

究者の方々によって、こういう論が成り立つのかどうか。或いは精緻な論考によって、愛知大学の原点と理想、その姿を解き明かしていただければ幸いである。

平成 26 年 4 月 1 日

いいづか ひろし (岩手県)

東亜同文書院大学 (46 期)

昭和 22 年愛知大学予科転入学

昭和 31 年愛知大学卒業